第二三回「くすの木俳句大会」ご報告　八月三一日（土）

第 23 回「くすの木俳句大会」及び表彰式は 8 月 31 日（土）、本校研修室で開催されました。創立 100 周年の第 1 回に始まり、20 年を超える句会となりました。途中、都合で本校を会場としての句会は控えられましたが、本校職員の方々や、同窓をはじめとし、俳句に集う多くのご縁のある方々の脈々としたご協力のもと、盛会のうちに締めくくることができました。

事前投句では本校の現役生徒諸君からの多くの投句もあり、次代を背負う若々しい息吹を感じました。生徒諸君の気骨のある作品を拝見し、これからのますますの研鑽と発展を期待しました。機会あるごとに俳句を詠んでいただきたいと願うばかりです。

幅広い多くの方々のご支援に感謝するとともに、今後とも宜しくご指導いただき、くすの木句会のますますの発展を願うばかりであります。

くすの木俳句大会の様子

今回は埼玉大学名誉教授山野清二郎先生（高 12）に「河越千句」についてのご講演をいただきました。　近代俳句は明治時代の子規に始まりますが、そこに至るまでの俳諧の大元について、特に「河越千句」の解析をもとに、現代俳句につながる視点を示唆していただきました。

その一端をご紹介しますと、連歌「河越千句」は今を遡ること 440 年以上前の応仁元年（1467 年）1 月 10 日～12 日までの三日間で執り行われたとのこと。「文芸」というものは静止したものとの思い込みがありますが、連歌は動くもの、移動の文学であり、「感嘆から感嘆へ」連綿と続くもの、というご説明に意義深く印象深いものがありました。

山野先生「天賞」表彰　小俣恵美子さん

藤先生「天賞」表彰　勝田仁恵さん

勝浦先生「天賞」表彰　藤英樹さん

「河越千句」は一日のうちに詠み終えたわけではなく、その文献からも 3 日にわたり場所をかえて詠まれ、千句にまとめあげられたものとのこと。その歌い出しは主催者の心敬が詠み、そのあとに道真の脇句が続き、二人で一首となる俳諧連歌が始まります。

梅園にくさ木をなせる匂ひかな　心敬
庭白砂のゆきのはるかせ　道真
野辺にうつれる道のはるけさ　宗祇

心敬は室町時代中期の天台宗の僧で連歌師。道真は室町時代の武将で、その子は太田道灌。連歌の始まりの句は連歌会が催された旧暦二月か三月のころの「現場」が詠まれています。目の前にほころび始めた三芳野神社の梅の花を詠んだものとのことです。そのあとに宗祇が続きます。連歌師宗祇は京を離れ東国に下向しており川越の地に足を運んだということです。

芭蕉は『笈の小文』のなかで「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道するものは一なり」と述べ、宗祇を歌の先輩として尊敬しています。

今様の言い方が赦されるならば、いわゆる俳諧のインフルエンサーたちがまさしくここ川越の地に集い、連歌にあそんだという史実は瞠目すべきことであります。

川越の文芸文学に再度目を向けられ、連綿と続く河越の歴史文化の側面に関心をもたれるのが川越人としての矜持ではなかろうかとまとめられています。

（参考：川高同窓会報第 59 号に山野清二郎氏の「河越千句について」の掲載があります）

参加賞「くすの木俳句大会」の名入り

藤先生（前列中央左）、山野先生（前列中央）、勝浦先生（前列中央右）、その他の参加者十四人。

（文責　栗原由郎）